

2014.4.6 「イエスは荒れ野に」 マルコによる福音書1:9～15

イエスは、神の業として「荒れ野に」送り出された。「荒れ野」とは、人間が住むには余りにも過酷な場所、生きづらく、困難な場所、受難を強いられる場所で、本来人間が住むべき場所ではないという意味である。

そこでサタンの誘惑を受ける。イエスが荒れ野にいる時、野獣と一緒にいたが、天使たちが仕えていたとあって、ここは、天使たちが危険な野獣からイエスを守っていたという意味ではない。そうではなく、野獣とさえ平和に過ごすイエスの姿と、天使たちの給仕、食卓の世話によって満ち足りて過ごすイエスの姿を伝えている。この誘惑とは、イエスが荒れ野で野獣から危害を受けることなく、食べ物の心配をすることもなく、極めて平和に不自由なく過ごすことであった。これは何を意味しているのか。

イエスはこの後、《ガリラヤへ行った》と記されている。その場所は、ユダヤにおいて最も貧富の差があり、差別された地域とも言われている。当時のユダヤでは、経済的にも精神的にも余裕のない人々が九割を占めていて、そのガリラヤでは、病にある者や障がい者に対して汚れた者と蔑視し、貧しい者たちを軽んじていた。まさに多くの人々が生きて行くには、生きづらく、過酷で、困難な場所、受難を強いられる場所としてガリラヤはあった。すなわち、ガリラヤは「荒れ野」として位置づけられる場所である。そこには、ほんの一握りの裕福な者たちがいて、権力を行使していく。多くのものが生きづらく、受難を強いられている中で、一部のほんのわずかな者たちが、幸福感に満ちていた。これは、荒れ野でのサタンの誘惑に陥った者たちがいるということではないか。

イエスがそのガリラヤに行くということは、まさに「荒れ野に」行くということ。そして、そのところで受難を強いられている人々と共に生きることをなされたわけで、難しい場所に自らを投じて関わっていく。安泰な平和な場所から抜け出して、命が脅かされる人々のただ中に身を置かれ、病ある者たちと、差別され、虐げられた人々と向き合うという事をされた。それがイエスの生き方でなかったか。私たちのこの時代もまた、人間が生きづらい、弱者が受難を強いられる荒れ野のようである。そういう意味でこの荒れ野のような社会の中で、教会がどう位置付けて宣教をしていくのか、問われているのではないか。(神谷)